

特42

986

寶錄 佐野鹿藏英勇傳 下卷



佐野鹿藏

春陽堂



言野
事思冥
紙少
委曲録

春陽堂巻元

春陽堂の印

實録 佐野志者 蔵美勇傳 下の巻

徳大館八郎左衛門 怖まふがらも駕より出て這(か)思ひも寄出敵呼(よ)り某(か)當領主の家主天満
宮代参の途中あり其処退(の)むと呼(よ)れ志賀十郎かりと打笑(う)ひ比真未練の汝(が)辞陳(を)れどて
許(よ)さんや彼是(は)相(あ)い出(で)んと走寄(は)り所(を)先(に)ある駕(を)より入(り)の武士立出(て)兩人の前(に)来(り)拙者(は)同藩(の)
者(は)て覆本(を)敷馬(を)申(し)事(は)あり只今承(れ)同役(は)小脇玄蕃(を)仇(を)ありと云(ふ)玉(も)今日(は)公用(の)途中(に)
り全(く)小脇(は)美館(に)せよ將軍家(の)代参(を)れ(は)暫(く)猶豫(を)せらる(べ)し玄蕃(も)とも敵(の)覚(を)りらん
は主相(は)相濟(は)後(は)尋常(の)勝負(は)いたさる(べ)し夫迄(は)同役(の)よ(は)み此場(は)拙者(が)預(め)る(べ)し而(も)所
ハ此橋(を)て志(を)らる(べ)の間待(を)玉(は)用事(を)済(了)後(は)主君(は)願(ひ)晴(を)ての勝負(は)たさる(べ)しと事(を)分(か)たる覆本
が辞(を)み兩人承(知)る(べ)其場(は)空(に)く見道(を)たるに然(る)に其日(の)暮(る)まで大館(は)更(に)来(ら)ざれ(は)欺
かれ(を)憤(り)い(て)城(中)に赴(き)渠(が)有(る)家(を)探(し)んと兩人城(の)許(に)至(る)を門番(の)者(共)に敵(方)
の廻(り)者(を)あらんと誤(り)思(ひ)おつ(と)りおめ搦捕(ん)とてけれ(は)辯解(を)せん(も)其際(を)と止(ま)を得(た)
兩人(は)多勢(を)相手(に)打合(を)中(に)龜(の)助(は)力(を)弱(り)己(を)危(く)見(え)けれ(は)志賀(十郎)ハ韋駄天(の)如(く)馳(り)

實録文庫

左野志賀蔵美勇傳卷下

二

来り組子をとつて砥石投退龜の助を肩引かけ片手と足を働取米組子をふまゑる蹴倒し
 一方の血路を開きやうく其場を遁出美濃路さしてむし走ふ晝夜を分たせ逃延て何る山里
 へ入て脊負たる龜の助を下に見るに半死半生ふれ互の懐中を探り見るに肌半身付たる墨
 付ばかりみて貯の金子の残多く失ひし途方暮れ手不手を取て口惜みみだ深く歎ふ沈みし
 かと敵を見道をも有所夫と知たれ仇を報るの近きふり心きたりし持ばりと龜の助を励ま
 し諫め或百姓家泊あり龜の助が痛強くれ兼用其他の代りて鎖帷子著替の物を皆賣
 拂ひ僅の金を調へて龜の助と葉を與此家小兩三日逗留敵の間近居ると故安をかへ付
 現んと談合中、美濃近江の境あるこが堤の非人の頭小車傳次とよ者を頼み非人の仲
 間ふり明暮龜の助が介抱あり看病急りふり故も夏の始ふ至り打身ハ少づ快け
 れと腰拔て立し能く然れども志賀十郎の敵のやうな氣あかれ一たび大坂ふ至り大館が舉動を
 窺んと龜の助を傳次等頼み大坂さして急ぐ程途中みて小石つまき足の小指の爪をさし
 きたる血汐を紙を以て拭ひ足早ふ過けるが是悲の前表と後みを思ひ知らまける○龜の助と

志賀十郎が出行跡非人共の貴ひふ出只一人堤の小屋に宿を窺ひ行く者のありし傳次とあり
 と小家を出月影透下見れば別人ふらむ大館ふれ是れ驚きつりあうら用意の腰抜んと
 まるを抜間ふ一太刀のびせかけ目くるめられも龜の助二たち三たちうち合より大館是をともも
 せ下足踏を急ぐたんびらに龜の助が細股へぶさ突通しコリヤ小童よく聞けよ先月天満橋ふ
 て出逢し時榎本が扱きて暫時其場へ遁れたれども教馬が手前もうろめてたく折角有附
 五百石も棒振振て直ふ欠落をらもあのおれ等を生して置て大館さまの出世の妨幸今日
 志賀十郎が留守を見定め出張したのだ夫が無念と思ふふらサア立上つて勝負をしろ可愛や
 腰が立ぬのりと大言吐を龜の助の無念と云ま一生懸命切込む刀大館の膝頭ふかきり狂
 を手負ひし打撃驚き飛きたり只一太刀ふえりし龜の助もがき苦み其休息絶ふける
 を大館の血汐を拭ひてとめを刺んとする折しも近付く人の足音ふ見付られと逃失せけりか
 ころ志賀十郎小車傳次も立戻り此有様驚天志賀十郎へ龜の助を呼活々介抱す
 るにやうやく我ふかりり兄上咬りのおそかり今宵大館此処来り病を見込かり討ちチエ

残念ありつゝとくやを此世の別きめてもくも息の絶え果たり志賀十郎齒がみをあゝ涙の雨と
 ふる郷を出て憂身を宿あゝと次をやつて此年月たまゝ敵に巡合ひ義理の弟をかゝり討
 よしく武運あつきたる我々おのれ大館此怨に射て思ひあらせんと前後ふりく敷き一が扱あるべ
 きふあらざれば傳次を頼み形をかりの野邊送りをふし夫より齒本國に立帰り老母お梅に
 亀の助がかり討の志だいを語り敷く
 二人を励して一夜あかして其朝路用
 の金をも貯て老母お梅お別を告げ
 本國を立出たりこたひ直尾
 張國に至り河田内記といへる者の道
 場宿り武者修行の浪人加藤登の
 助と立合是をうち居る同国名譽
 を頭一茲に教日逗留あせども敵の



残念ありつゝとくやを此世の別きめてもくも息の絶え果たり志賀十郎齒がみをあゝ涙の雨と
 ふる郷を出て憂身を宿あゝと次をやつて此年月たまゝ敵に巡合ひ義理の弟をかゝり討
 よしく武運あつきたる我々おのれ大館此怨に射て思ひあらせんと前後ふりく敷き一が扱あるべ
 きふあらざれば傳次を頼み形をかりの野邊送りをふし夫より齒本國に立帰り老母お梅に
 亀の助がかり討の志だいを語り敷く
 二人を励して一夜あかして其朝路用
 の金をも貯て老母お梅お別を告げ
 本國を立出たりこたひ直尾
 張國に至り河田内記といへる者の道
 場宿り武者修行の浪人加藤登の
 助と立合是をうち居る同国名譽
 を頭一茲に教日逗留あせども敵の

手掛りあらざれば東海道へと出行
 ける侍て大館八郎左衛門内田亀
 の助を討ち是も東海道を下り金谷
 の宿に休み居たる志賀十郎か通
 りかゝる次女を見るより大小驚き先
 一駈ぬけ大井川の川越にも小金子
 をあゝ今此川を渡るおらぐの士ふ
 喧嘩を仕分水中溺死させ呉よと
 頼みけるふ欲ふ目のあき川越にも心得て待所ふ志賀十郎ハ斯ともあらば川を渡らんとせよ
 満水ありとてこのあ渡さば志賀十郎は賃金を問屋場拂ひ上六汝等小頼ぬと衣類大
 小を頭結付け川へ飛び入泳ぎ行く小川越共も数百人川中へ飛び込み志賀十郎が跡を追ひかけ
 捕へんとあられは志賀十郎は水中にて多勢を相手なり付奴原足を以て蹴倒し引摺んでを



残念ありつゝとくやを此世の別きめてもくも息の絶え果たり志賀十郎齒がみをあゝ涙の雨と
 ふる郷を出て憂身を宿あゝと次をやつて此年月たまゝ敵に巡合ひ義理の弟をかゝり討
 よしく武運あつきたる我々おのれ大館此怨に射て思ひあらせんと前後ふりく敷き一が扱あるべ
 きふあらざれば傳次を頼み形をかりの野邊送りをふし夫より齒本國に立帰り老母お梅に
 亀の助がかり討の志だいを語り敷く
 二人を励して一夜あかして其朝路用
 の金をも貯て老母お梅お別を告げ
 本國を立出たりこたひ直尾
 張國に至り河田内記といへる者の道
 場宿り武者修行の浪人加藤登の
 助と立合是をうち居る同国名譽
 を頭一茲に教日逗留あせども敵の

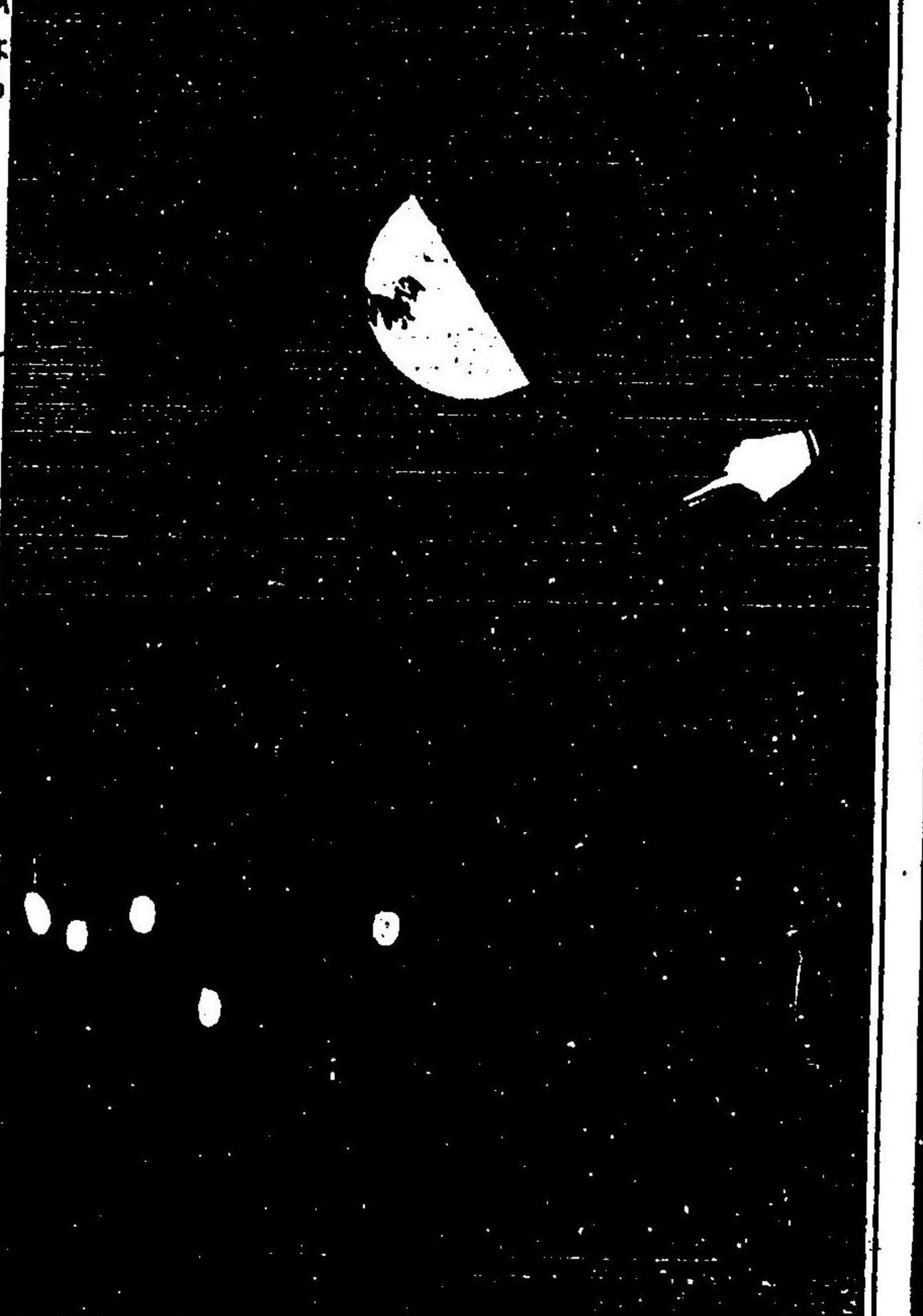
手掛りあらざれば東海道へと出行
 ける侍て大館八郎左衛門内田亀
 の助を討ち是も東海道を下り金谷
 の宿に休み居たる志賀十郎か通
 りかゝる次女を見るより大小驚き先
 一駈ぬけ大井川の川越にも小金子
 をあゝ今此川を渡るおらぐの士ふ
 喧嘩を仕分水中溺死させ呉よと
 頼みけるふ欲ふ目のあき川越にも心得て待所ふ志賀十郎ハ斯ともあらば川を渡らんとせよ
 満水ありとてこのあ渡さば志賀十郎は賃金を問屋場拂ひ上六汝等小頼ぬと衣類大
 小を頭結付け川へ飛び入泳ぎ行く小川越共も数百人川中へ飛び込み志賀十郎が跡を追ひかけ
 捕へんとあられは志賀十郎は水中にて多勢を相手なり付奴原足を以て蹴倒し引摺んでを

残念ありつゝとくやを此世の別きめてもくも息の絶え果たり志賀十郎齒がみをあゝ涙の雨と
 ふる郷を出て憂身を宿あゝと次をやつて此年月たまゝ敵に巡合ひ義理の弟をかゝり討
 よしく武運あつきたる我々おのれ大館此怨に射て思ひあらせんと前後ふりく敷き一が扱あるべ
 きふあらざれば傳次を頼み形をかりの野邊送りをふし夫より齒本國に立帰り老母お梅に
 亀の助がかり討の志だいを語り敷く
 二人を励して一夜あかして其朝路用
 の金をも貯て老母お梅お別を告げ
 本國を立出たりこたひ直尾
 張國に至り河田内記といへる者の道
 場宿り武者修行の浪人加藤登の
 助と立合是をうち居る同国名譽
 を頭一茲に教日逗留あせども敵の

深水へ投込さながら魚虎の荒たる如き働き大河に馴たる川越共も持ほまゝに見之ける処水
 勢烈しき大浪の水より一時小来り志賀十郎を始と多勢の川越一同不押流さま行衛も
 知れなりふけり大館に此有様を大勢の中不密み見て居たりか志賀十郎が水中不溺せし
 を見るよりも心中不笑を合み騒ぎふ紛まて立去りりり○茲不奥州白川油屋福右衛
 門といる富貴の町人ありけるが甲
 州身延山参詣せんと娘を伴ひ上下
 六七人にて己不帰国の折柄信州迄
 来り金澤峠をかざる折も大勢の
 盗賊不付られ荷物路用を奪ひと
 られ刺山賊共の娘を肩不引かけ
 て連行んとあせ折柄一人の武士蔵
 より阿がり来り今このさまを見る



に忍びて刀を振りりと抜放ち忽地
 五六人切殺せ不残れる奴も怕ををし
 散々不逃去りられ福右衛門主従
 へ危急を遁れ彼武士へ一礼を述る
 処山賊の頭めて我慢太郎といるも
 の手下が知らせ不打驚き其奴仕留
 めて呉んむと筋鉄入たる櫓の棒かろ
 くこと打振てせ来るを武士へ少も

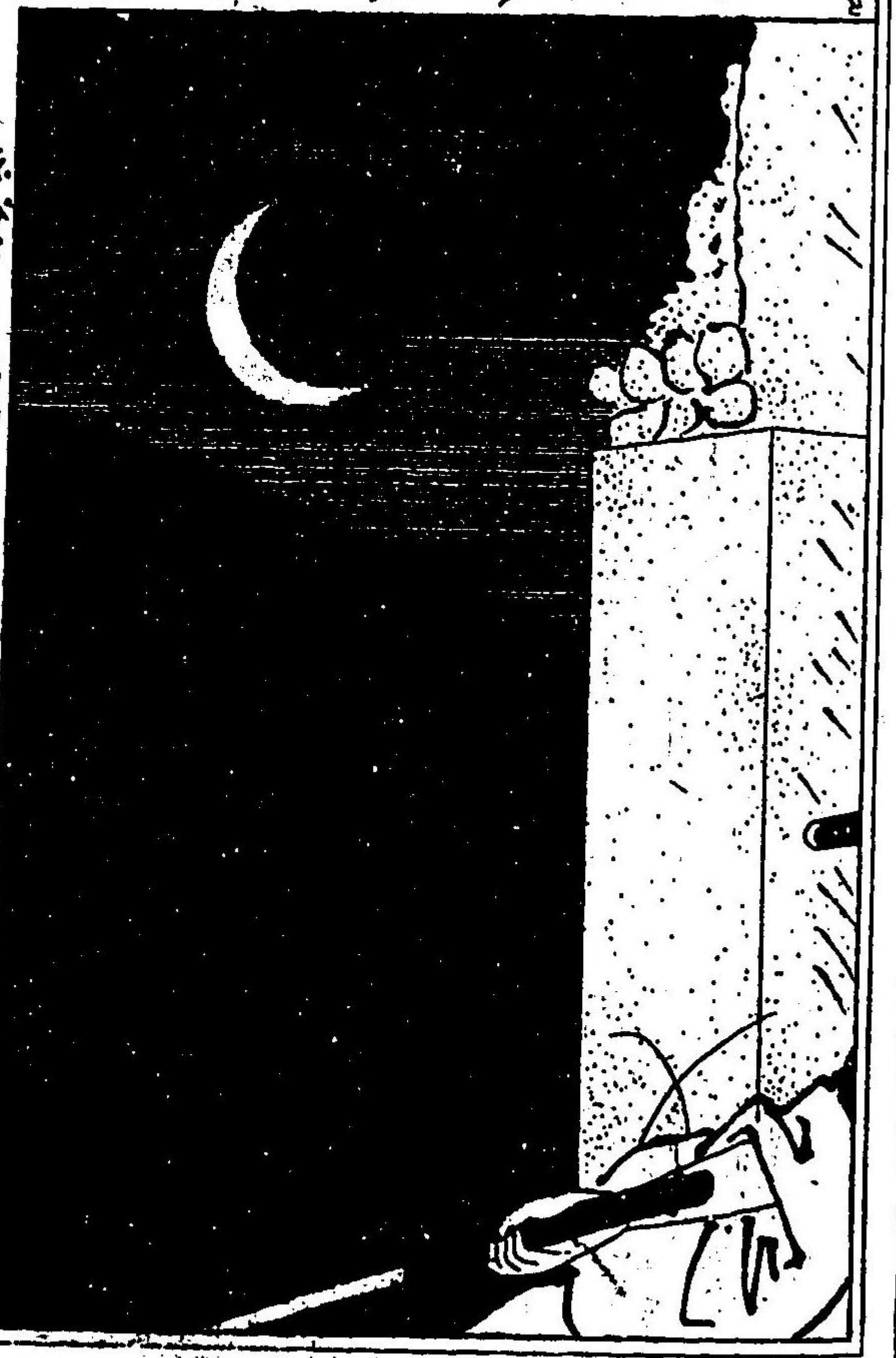


驚きの聲をりらひ透を見て我慢が脾胃をよりと蹴まば櫓の棒の重み不よろめき倒る所を
 頭の上を踏まれれば脳砕け両眼飛出で血汐を吐て死でり福右衛門主従この休を見て膽を
 冷地上ぬり付再拜我名を各乘恩を謝其姓名を尋る不我事佐野志賀十郎と云武
 者修行の浪人ありと答下れば福右衛門其夜旅泊を俱ふあり志賀十郎をさまぐ歎食應

奥州白川邊御修行の前必拙宅に立寄下さるべくして書付を殘し翌日宿を立出下途分て互
 不別れり佐野志賀十郎大井川をて危難の時川下流を辛く一命を助り夫より信濃路
 へ赴一故己小倉澤峠を福右衛門寺を救ひあり憐て志賀十郎日数を經て上州路へ
 あり頃己小霜月の下旬中て俄大雪降出寒氣肌を貫か如く早く里ある方子出で宿
 を取んと思ふも不知案内ある山路を
 迷ひ計らば足をふりて一ともの
 谷間落たるまどくんとせん術を
 くむせんとして何をみる処一雪を
 蹴立て大熊一匹此方を一と馳せ
 来り志賀十郎を見るよりも猛りか
 りつて飛付を心得たりと身を捨り
 熊の後まよよと見えしが脊を去



か抱きとめ一身の力を拳ふ入れ只一
 打ふうち懲せ熊は立つくと立上りて
 勢が猛く組付を怖る色ま直組伏
 せ又續さま小三四十拳を打ちて打
 る不得了不猛き荒熊も頭上を碎か
 れ死でりり志賀十郎此働き小寒
 さを忘れ摠身より汗を流しホット一
 息つく折も二人の獵師山を下り谷
 小下り是を見て驚くことおほくあまよも九人ふて看すと怖を申し志賀十郎が前不來り此
 荒熊折々人をあやむる不依り領主すりの命として我々不仕留まさんとあし玉ひたれも年經
 る猛獸故容易に討てざる処其元さま是を打殺し玉ひたる水滸傳ある行者武松景陽岡に
 て猛虎を打殺しを目前不見るとく恐入也とひとまら感賞せし志賀十郎熊を兩人の者



か抱きとめ一身の力を拳ふ入れ只一
 打ふうち懲せ熊は立つくと立上りて
 勢が猛く組付を怖る色ま直組伏
 せ又續さま小三四十拳を打ちて打
 る不得了不猛き荒熊も頭上を碎か
 れ死でりり志賀十郎此働き小寒
 さを忘れ摠身より汗を流しホット一
 息つく折も二人の獵師山を下り谷
 小下り是を見て驚くことおほくあまよも九人ふて看すと怖を申し志賀十郎が前不來り此
 荒熊折々人をあやむる不依り領主すりの命として我々不仕留まさんとあし玉ひたれも年經
 る猛獸故容易に討てざる処其元さま是を打殺し玉ひたる水滸傳ある行者武松景陽岡に
 て猛虎を打殺しを目前不見るとく恐入也とひとまら感賞せし志賀十郎熊を兩人の者

ふさらせ彼獵師等と共に路を求めて里に至り其夜獵人の家泊りて翌朝此処を出立し下野
 国不暫く旅宿せしが敵大館にも出合を民十郎も巡逢ねは是より何処を尋ねんと考へ実小真
 州は大国あれは彼国不赴かんと陸奥より急ぎつ白川不來りく油屋福右衛門を尋ね案内
 する福右衛門不立出で恩人よくこそ尋ね玉ひたれとて志賀十郎を客間不通し妻娘とも
 立出て種々饗應ありて数日とめ今
 年の寒氣強けれ我家不逗留し
 玉ひて明あは発足したまひかといとね
 もころ不もてありたり○茲不又同ト
 白川の里の郷士不十時浦の助といも
 者有り其悴正の助若氣の至みや油
 也の娘不恋慕しつらむもして手不入ん
 と此頃おのが家不逗留あり武者修



志賀十郎を客間不通し妻娘とも
 立出て種々饗應ありて数日とめ今
 年の寒氣強けれ我家不逗留し
 玉ひて明あは発足したまひかといとね
 もころ不もてありたり○茲不又同ト
 白川の里の郷士不十時浦の助といも
 者有り其悴正の助若氣の至みや油
 也の娘不恋慕しつらむもして手不入ん
 と此頃おのが家不逗留あり武者修

行加藤登の助を頼み妻不せんことを
 油やうへ云入る福右衛門對面
 して娘不戀望の義不忝けあけれ
 彼義理有り子ゆゑ他嫁はとい
 堅くは断申をありとの返答ゆゑ登
 の助の威猛たらふあつて理を非不曲が
 ても武士の意地刀不かけて承引あり
 貫ひたりとて我意不慕してわめくに



を福右衛門もてありしづれ明日返答せんとして登の助をせうやく帰し志賀十郎不談合あり登の
 助の再び来るを手筈を定め待たぬと翌日早朝登の助正の助と打連立ち油屋が玄関不來りて返事
 聞んと待程不志賀十郎立出で登の助不對面あり珍や如藤氏尾張不於て手合せあり佐野志賀十郎
 みてあり貴殿方當家の娘を望みとあつて強て腕尺を云立御入來りく由然れども某も懇望せし

女ふれ貴殿と某立合勝負不よつて是を望まん此義如何不先をきされ登の助に心中大不驚くと
 虽一義不及ばさらば里もづれの廣野不出て有無の勝負を決せんと双方とも支度お彼原不立
 出て登の助に心の助不目くせお刀引抜き切付るを志賀十郎いちつとも騒かば二人を相手不進
 一退慮々実々の秘術を尽し電光石火と戦ひるかる折も見物お分け町人体の一人の若者一
 の刀箱を携へたるがつうくと打近より
 三人烈しく戦ふ中へ携へたる刀箱をつ
 き出し刃と刃の真中を箱をもつて志
 つりと押其上へつうくと坐し御両処とも
 暫く留り玉へが僕めい當処不旅宿お
 花刀商人でいけ兩士の戦ひ玉ふのみらい
 御出入場の若旦那すけすまかのかの仕合
 仔細を聞いませつかの意氣地より事



目録

起りこの取沙汰失礼あがり一時の
 怒より身を捨てたまふ勇士のせざる
 所ふいはいちや千慮の一失思者の二得
 町人ながらも武家方の御道具を業
 とする僕ふれは高賣物の刀も免ト
 御止り下さるべしと理義を分たる一
 言ふ如藤十時大入志賀十郎と
 相引ふあり互ふ刀を納め果して十時
 如藤は打連て一先宿所へ引取ぬ志賀十郎は此町人の始より内田氏十郎とと思ひしうご加藤十
 時の手前をかねしむも掛をぬたり一兩人退きたる跡見送り民十郎との一別以来とよかに
 此方も立寄り志賀蔵どのかあつかやと互ふ手と手を取かき一途中途中あは油や方みて物
 語らんと連立て油也と帰来り佐野に福右衛門ふあうくと今日の次第をあらまし語り民十



郎平向ひ本国の一部始終を源五右衛門の横死の事より龜の助とも小仇討ち立出で三年越へ旅路を経て美濃国こがりの堤ふて龜の助が返討ちありしときをもちもあく物語れは民十郎の聞度毎に驚き歎き口惜涙をぬけるがやうやく涙を押し某も長尾殿の情なつて身を全し宝劔を尋んため此陸奥に旅寐して刀商人となりて詮義あせども未宝劔の有処忘れぬ本國の安危を聞くふいとまきさのりーがきて父弟も討れしと思ひも寄らば今より貴殿と諸共敵大館が行方を探し仇を報せし亡霊の手向んと思ふより彼大館芦花は父弟の仇のみならず我身替りふしたる家来忠助の為やも仇ありするをも忠助奥州白川の生を継母の説ふゆて弟



郎平向ひ本国の一部始終を源五右衛門の横死の事より龜の助とも小仇討ち立出で三年越へ旅路を経て美濃国こがりの堤ふて龜の助が返討ちありしときをもちもあく物語れは民十郎の聞度毎に驚き歎き口惜涙をぬけるがやうやく涙を押し某も長尾殿の情なつて身を全し宝劔を尋んため此陸奥に旅寐して刀商人となりて詮義あせども未宝劔の有処忘れぬ本國の安危を聞くふいとまきさのりーがきて父弟も討れしと思ひも寄らば今より貴殿と諸共敵大館が行方を探し仇を報せし亡霊の手向んと思ふより彼大館芦花は父弟の仇のみならず我身替りふしたる家来忠助の為やも仇ありするをも忠助奥州白川の生を継母の説ふゆて弟

小家督を譲り肥後まきせら我方奉公せし聞か此辺を尋たらんする定め由縁の者あるべし語るを聞て福右衛門は民十郎に打向ひその忠助を僕が兄ありけり廿年以前妻子を置いて家出かりけりか叔御主人の御身替ふ立玉ひか則この娘を兄か妻の腹に残せし忘れがたみよと親子に歎き沈みけり民十郎も志賀十郎も叔の血筋の人々と俱歎きまくれるが民十郎福右衛門親子に俄に佛前におぬつき回向する折から十時加藤の外一人の武士を引連れ案内を乞て入来り志賀十郎福右衛門は是迄の不礼を打託び以後改て水魚の交をいたたくとて連れたる武士を志賀十郎引合せ此仁の柳田丹藏とて諸国修



小家督を譲り肥後まきせら我方奉公せし聞か此辺を尋たらんする定め由縁の者あるべし語るを聞て福右衛門は民十郎に打向ひその忠助を僕が兄ありけり廿年以前妻子を置いて家出かりけりか叔御主人の御身替ふ立玉ひか則この娘を兄か妻の腹に残せし忘れがたみよと親子に歎き沈みけり民十郎も志賀十郎も叔の血筋の人々と俱歎きまくれるが民十郎福右衛門親子に俄に佛前におぬつき回向する折から十時加藤の外一人の武士を引連れ案内を乞て入来り志賀十郎福右衛門は是迄の不礼を打託び以後改て水魚の交をいたたくとて連れたる武士を志賀十郎引合せ此仁の柳田丹藏とて諸国修

行の人あるが佐野氏の英名をかねく慕ひ門下不属せんと義故同道致たりと引合けるに
 志賀十郎八郎下ふて門人を得(き)器量ありと辞(を)を志るて所望(を)太刀筋を試み師弟の
 契約ありふも是より咸々打解て酒宴をあり四方(の)物語を志るふ柳田丹藏(に)るやう
 某越前国福井(に)於て町道場を構(え)たる八重垣流の達人小脇玄蕃(と)いる者と試合あり彼
 者(に)兩度おくれを取たりと語りけ
 れ志賀十郎横手を打ち其者(を)
 を敵大館八郎左衛門(が)変名あり
 と听(き)より内田民十郎(に)天を拜(ま)じ地
 を拜(ま)じ悦びけれ(に)坐(す)の諸士(の)
 仔細(を)尋ぬるに今(も)包(む)ふ由(を)あし
 謝討(の)次第(を)語りけれ(に)我々(も)助
 太刀(に)参(ま)るべ(し)云(を)堅(く)制(し)



留(と)め今宵(の)夜(も)も語(り)明(け)明(け)
 早朝(より)出立(せ)んと云(ふ)福右衛門(が)
 俱(く)々(と)悦(び)是(を)首途(の)盃(と)あ(り)餞(れ)別
 を祝(い)路用(を)贈(り)志賀十郎(に)民十郎
 支度(を)さすうち夜(も)明(け)れば再會(を)契
 り出立(せ)不及(ぶ)に皆(く)々(と)国境(まで)送りけ
 る(が)兩人(は)茲(こ)めて皆(く)々(と)別(れ)を告(げ)途(を)
 急(ぎ)日(を)経(て)越後(の)国高田(まで)来
 り(し)越前(福井)迄(に)僅(く)四日(路)ある故(に)旅宿(を)設(け)駈引(の手)筈(を)定(め)翌朝(より)四日(目)越前(福
 井)著(し)血氣(も)ゆる民十郎(を)志賀十郎(に)殘(し)まきその身(を)大館(が)道場(に)案内(し)れば八
 郎(左衛門)の玄蕃(に)立出(て)對面(を)あま(り)何(を)計(ら)ん佐野志賀十郎(に)みてり(し)其(の)休(み)退(き)け
 れ(し)志賀十郎(は)懐中(より)一封(の)書翰(を)取出(し)是(を)殘(し)おきて立歸(り)ぬ大館(跡)にて披(き)見る



留(と)め今宵(の)夜(も)も語(り)明(け)明(け)
 早朝(より)出立(せ)んと云(ふ)福右衛門(が)
 俱(く)々(と)悦(び)是(を)首途(の)盃(と)あ(り)餞(れ)別
 を祝(い)路用(を)贈(り)志賀十郎(に)民十郎
 支度(を)さすうち夜(も)明(け)れば再會(を)契
 り出立(せ)不及(ぶ)に皆(く)々(と)国境(まで)送りけ
 る(が)兩人(は)茲(こ)めて皆(く)々(と)別(れ)を告(げ)途(を)
 急(ぎ)日(を)経(て)越後(の)国高田(まで)来
 り(し)越前(福井)迄(に)僅(く)四日(路)ある故(に)旅宿(を)設(け)駈引(の手)筈(を)定(め)翌朝(より)四日(目)越前(福
 井)著(し)血氣(も)ゆる民十郎(を)志賀十郎(に)殘(し)まきその身(を)大館(が)道場(に)案内(し)れば八
 郎(左衛門)の玄蕃(に)立出(て)對面(を)あま(り)何(を)計(ら)ん佐野志賀十郎(に)みてり(し)其(の)休(み)退(き)け
 れ(し)志賀十郎(は)懐中(より)一封(の)書翰(を)取出(し)是(を)殘(し)おきて立歸(り)ぬ大館(跡)にて披(き)見る

尋常の勝負あるべしとの文面あるゆゑ此由門弟等に物語りて支度調待程志賀十郎
 旅宿に帰り民十郎の委細を語りその夜音川侯よりの仇討免許の墨付當国の領主の執
 權職方旅宿の亭主を以て傳達し夜明んとする頃民十郎の鎖帷子を下し著込み白装
 束鉢巻志賀十郎の黒紋付の拾小袖一同鎖帷子を著し小袴の裾くりりけ大
 館が道場目かけ天へも登る心地にて馳至る小門を閉てせまばくたれ民十郎の聲高し昨日佐
 野志賀十郎より書面を傳達する如く内田民十郎向ふたり父の仇弟の敵大悪無道の大館
 八郎左王門と出て勝負をせよと門の扉をうち敲け大館に死せしと思ひ志賀十郎のみ
 あり民十郎まで来りし心の中おたやあらねども大勢を頼みこし支度とくの一門
 を開け門弟一同に接連して討てかれ志賀十郎の面倒より軒端植たる松の古木をえん
 うと引抜ききくるとより廻り群る奴原追散を其隙に民十郎大館目かけ打てかれ八郎
 左衛門心得たりと受流し二打三打戦ふ大館兼て頼みおきたる當地の兇徒數十人民
 十郎が後より得物々々を打ちく四方を包て討てかゝるを志賀十郎門弟等を防ぎながら

一町をかり隔ちたれ民十郎の前より大館かり後み大勢ふかられほしく危く見えたる
 処大勢の後より三人の武士接連して助力をおこし民十郎は是を見お加藤十時柳田あればま
 ち精神を励まして戦ふたりされども先刻より大勢を相手ふ受かれゆえ打太刀四度路のそ
 の上大館の新手あれば墨みつけて切まくるに民十郎の数ヶ所小疵を負ひ己返討と見えたる
 所志賀十郎門弟等を追散し夫と見るより走り来り八郎左衛門が襟髪とつて地上へ倒と
 投付るを民十郎は踊り上り大喝一聲大館が肩先より乳の下かけてをらまんと切下げたり
 志賀十郎の聲をかけお身初太刀を去玉ひたれ弟龜の助が名代ありと左の腕をうち
 落し乗懸つて止命をさせ民十郎は立寄て首打落し立たりり此時當国の領主より警
 固の役人大勢を卒し遠来りて居たりり首尾を討たるを見て此所へ馳来り両吉
 孝義を感じたる茲に加藤十時柳田の三士の兇徒どもをあるひ討取又諸方へ追散し
 同く此所へ馳来り我々助太刀せんと思へど許されねば貴殿方と道をちがへ當国来り
 もから民十郎殿の危きを救ひたりと語りければ其志を感じて頓て源五右衛門龜の助

